

教科書が読めない

2022.6.7

教室の半分の生徒が、実は教科書が読めないとなったら、どうであろうか。これは、声に出して読めないということではなく、文章の意味が理解できない、わからないということである。

教科書神話という言葉はないのかもしれないが、教科書に書いてあることは、最初から理解できるものという前提で、学校では教育活動が展開されてきた。ところが、半分の生徒が教科書に書いてあることの意味が理解できていなかったとなれば、学校教育は大きな転換を求められることになるにちがいない。

オーストリア、次いでチェコスロバキア西部を併合したドイツは、それまで対立していたソ連と独ソ不可侵条約を結んだうえで、1939年9月、ポーランドに侵攻した。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

ポーランドに侵攻したのは、( ) である。

- A オーストリア    B チェコスロバキア    C ドイツ    D ソ連

こんな簡単な問題ができないのかと思われる方もいらっしゃるだろう。だが、実際に1/4の中学生ができないのである。次の問題はどうか。

アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。

セルロースは( ) と形が違う。

- A デンプン    B アミラーゼ    C グルコース    D 酵素

このような問題ができないとなれば、授業中の先生方の話も理解できない部分があつて当たり前となる。教員が、今まで何の疑問も抱かず、わかっているものだ、わかっているはずだとしてきたものが、実はそうではなかったことが明らかになった。

いや、何年も前から、教員はこのことに気づいていたのではなかろうか。例えば、計算はできるが、文章題になるとできない子どもが存在する。文章の意味が理解できないのである。このようなことから、薄々はわかっていたはずである。それでも、そうは思いたくはなかったのかもしれない。教科書がわからないとなると、教員にとっては由々しきことである。

授業を担当する教員は、当たり前を排除し、子どもたちは、どこでつまづいているのか、どこがわからないのかを真剣に考え、授業を進めていかなければならない。学校の授業は、そういった状況にきている。子どもたちは、いつの間にか、わからなくなっていたのである。そうであるならば、教員の意識を変えていかなければならない。そして、子どもたちを救わなければならない。